様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１４５０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０２６２６

研究課題名（和文）保育における音楽を伴った身体表現活動の活用モデルの開発

研究課題名（英文）Development of a model for utilizing physical expression activities with music in childcare

研究代表者
門脇　早聴子（Kadowaki, Sakiko）

兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授

研究者番号：４０７４７６６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本稿では明治期から現在までのフレーベル式教育の遊戯受容の変遷について扱った。本研究においては、変遷の中で、いずれの教育者も子どもの自発的な表現を大事にしていたという共通点を見出した。保育で取り組まれている身体表現活動についてアンケート調査の結果、子ども自身の思いや考えを表現するための方法や理論の提示や、動画コンテンツ教材の必要性が明らかになった。
また、段階的な表現活動を構築したエリソンの研究をもとに、リズム表現から子ども自身の思いを実現するクリエイティブな身体表現活動へ発展する過程を事例とともに示した。さらに、基礎的なものから発展的なものまで動きのバリエーション動画の作成を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
身体表現活動は様々な段階を行き来しながら高次化していき、感性や表現する力を養いながら創造性を豊かにしていくことを保育者が意識することが重要である。そこで、子どもが明確な動きの感覚を身につけるとともに音楽に反応する力を養う「フォーマルリズム」、音楽に対して子どもの基本的な体の反応を促す「インフォーマルリズム」、音楽に対する自分の気持ちに従って動く「クリエイティブリズム」の身体表現活動の段階について保育者自身が理解し、動きの事例動画をもとにした実践を行うことで、身体表現活動を通して子どもの自己表現力を育む実践が行いやすく、保育者同士が共通理解に繋がると考える。

研究成果の概要（英文）：From the Meiji era to the present, various educators have noted the importance of Froebel-style education as games are necessary for the physical and mental development of young children. This study found a common point in that all educators valued the spontaneous expression of children in the transition of acceptance of “Yugi.” The results of a questionnaire survey on physical expression activities undertaken in childcare revealed the need to present methods and theories for expressing children's own thoughts and ideas, as well as the need for video content materials.
Based on Ellison's research that constructed a step-by-step expressive activity, the process of developing from rhythmic expression to creative physical expressive activity that realizes the child's own thoughts was shown with examples. In addition, we created a video of variations of movements, from basic to advanced.

研究分野：保育における音楽を伴った身体表現

キーワード：身体表現活動　自己の表現　クリエイティブリズム　実践動画の作成　ねらいに基づいた活動

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

⑴　身体活動は、特に音楽と親和性が高く、身体で表現する対象が音楽（メロディーやリズム）、歌詞等である場合が多い。これまで、身体表現活動の歴史は音楽的身体活動を軸に明治期より展開され、時代の変化と共に活動方法は多様化しているが、現在も多くの身体表現活動が存在する。しかし、阪神間の保育所、幼稚園、認定こども園を対象にした身体表現活動に関するアンケート調査により、保育者はどのような種類の身体表現があるのか、またどの活動が対象の子どもに有効なのか、選択の難しさが挙げられた。その理由に、初等教育の教科書のような全国共通のテキストがないため、どのような活動を行うかは保育者の裁量に任されていることにある。

⑵　平成 29 年の保育所保育指針・幼稚園教育要領改訂の領域「表現」では、子どもが身体で表現する意欲とその過程を重視する保育者の姿勢の記述はあるが、具体的な活動の記述はない。また上記のアンケートで、保育者は身体表現の具体的な方法の習得に関心をもち様々な研修会に参加し保育に取り入れる機会があるものの、習得内容から自身で発展させることが難しく単発的な活動に留まることが明らかになった。

　そこで、多様にある身体表現活動について、活動の意義、特徴、方法の体系的モデルを視覚・聴覚的に示し、保育場面に応じた活動を系統的かつ継続的にすることの必要性があるとした。

２．研究の目的

⑴　本研究の目的は、領域保育内容「表現」の音楽に合わせた身体表現活動において、保育者が活動の教育的意義を理解した上で容易に活用できる教材の開発、及び保育者向けマニュアルを作成することである。

⑵　そのため、まず音楽を伴った様々な身体表現活動を歴史的経緯と共に目的、意義、特徴、具体的な方法を提示し、保育者がねらいに合わせ活動を容易に選択できるようにする。また、一つの活動を様々な方法で発展させられるよう、具体的な内容や方法を提示する。

３．研究の方法

⑴　明治期から現在に至るまでの保育における身体表現活動の変遷の中で、教育者たちがどのように繋がりお互いの思想に影響を及ぼしたのか、関連図を作成することにより身体表現の意義と内容を概観した。

⑵　全国の保育所（園）・幼稚園・認定子ども園、総数 600 園の保育者にアンケートを行い、保育で取り組まれている身体表現活動の実態、及び求める教材に関する調査を行った。

⑶　アンケート結果から活動を推進している園を 4 つ程度ピックアップし実地調査を行い、活動に至った経緯から活動の実態、年齢・発達別の子どもの反応、効果を調査した。

⑷　保育において多様な形態で行われている身体表現活動の中で、基本的な動き「フォーマルリズム」をはじめ、子どもが考え出した創造的な動き「クリエイティブリズム」を表現する事例から、どのような力が育っているのか保育者の視点から明らかにした。

⑸　これらの内容をもとに、一つの動きを元に基礎的なものから発展的なものまで動きのバリエーション動画の作成を行なった。それにより、「自己表現力を育む」等のねらいに基づいた身体表現の持続的な活動のコンテンツとしてまとめた。

４．研究成果

⑴　明治期から現在の「表現」に至るフレーベル式の教育による「遊戯」受容の変遷について、図を用いて明らかにした。時代の分類は、東京女子師範学校附属幼稚園で実践された明治期の「唱歌遊戯」、明治期後半にキリスト教系幼稚園から広まった「リズム」、大正期から昭和初期にかけて改変された児童中心主義の「遊戯」、文部省により要領が整理された戦後の保育内容「リズム」から幼稚園教育要領「表現」、の 4 つである。時代ごとの流れを図にまとめることで、教育者の思想の道筋を辿ることができた。

　その中でも注目した時代は、大正期から昭和初期の遊戯で、図 1 の通りである。児童中心主義が進む大正期は、それまで一般的に行われていた型のある「遊戯」からの脱却を模索した時期であった。教育者の倉橋惣三、戸倉ハル、土川五郎、小林宗作は、大人の考えた「遊戯」ではなく、子どもの自由な表現の必要性を出張した。但し、自己表現としての「遊戯」に対する考え方に違いがあることが明らかになった。戦後は、フレーベルの子どもの自発的な表現を大事にするという思想と、距離を置いた考え方であったが、平成になり「表現」に変更されたことで、「遊戯」は、音楽だけに限らず、様々な表現形態を行うための総合的な活動を包括とするものへとなった。

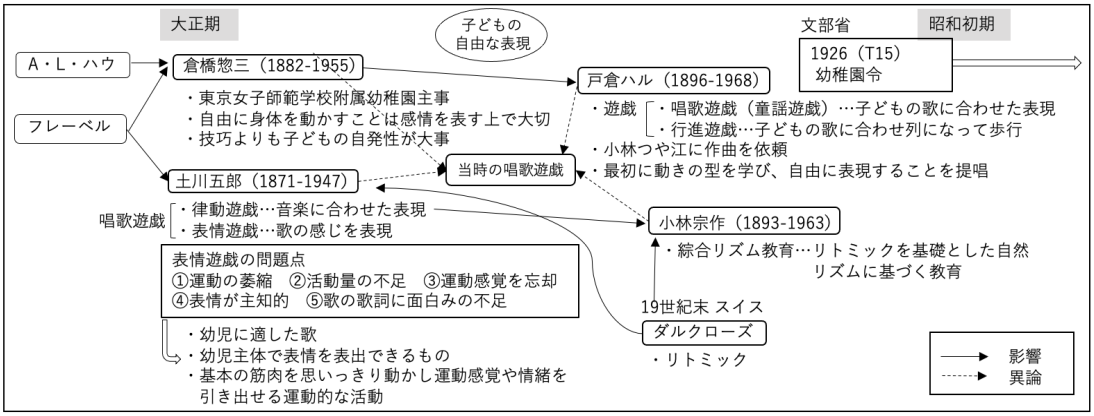

図１　大正期から昭和初期の遊戯に関する教育者の変遷

フレーベルの考え方の影響を受けた教育者により、どの時代においても、子どもの自発的な表現を大事にするという共通点が見られた。一方で、「遊戯」の種類や方法等は少しずつ異なることが明らかになった。その証として、「遊戯」という言葉は、時代を跨いで「唱歌遊戯」、「律動遊戯」、「表情遊戯」、「音楽リズム」、「リズム」、「表現」等に変化している。当時の様々な教育者らにより、「遊戯」の方法が模索された結果が、文言の変遷から見て取れた。

(2)　保育における身体表現活動の状況に関する調査結果は、全国の保育所（園）、幼稚園、幼保認定型こども園からランダムに総数 600 園へアンケート調査を行い、158 園の回答があった。保育で最も取り組まれている身体表現活動としては、「子ども向けのダンスや体操（エビカニクス等）」が約半数を占めており、次に「音楽に合わせて「歩く」や「スキップ」をするリズム遊び（リトミック含）」が 4 分の 1 の割合であった。一方で、「わらべ歌遊び」や「象やうさぎ等になりきる象徴的な動き」に関しては、1 割程度に留まった。

また、それら活動の主なねらいについて、10 種類からを 3 つ選択する質問を行った。回答結果は、「自己表現力を育む」が 23%と最も多く、その次に「身体の成長を促進する」17%、「リズム感を獲得する」16%となった。しかし、「集中力の向上」4%、「感性を磨く」7%、「創造力を豊かにする」7%、「自発性や主体性の向上」8%と低くなっている。この理由として、上記に示した主に取り組む活動として挙げた「子ども向けのダンスや体操」や「音楽に合わせて「歩く」や「スキップ」をするリズム遊び（リトミック含）」といった活動は、あらかじめ動きが決められている場合が多い。またこれらは模倣から広がる自己表現であり、身体の成長やリズム感を目に見える形で獲得していきやすい活動といえる。しかし、感性や創造力、主体性といったものは、個々の内面を見ていく必要があり、またすぐに形になって現れるとは限らないことから、ねらいに設定しづらいという点が考えられる。動画コンテンツを含めた教材のニーズとしては、全体の割合の中で「音楽に合わせて「歩く」や「スキップ」をするリズム遊び（リトミック含）」34%、「わらべ歌遊び」25%と、高いことが示された。その理由として「リズム遊び」は、手探りで情報を得ることが多いといった点や、保育者が共通指導できる教材が欲しいという理由が挙げられた。また「わらべ歌遊び」は、自分は苦手、または知らないものが多いが伝承していきたいといった内容であった。その他の注目点としては、表現遊びをしたいが、やり方がわからないといった意見もあった。これらから、それぞれの園の方針や保育者の得意なものを実践していること、またやってみたいが難しいと感じており、使いやすい教材があれば取り入れたいと考える保育者の現状が明らかになった。

(3)　表現について「あらわしの構造」から分析した大場牧夫(1931-1994）の理論（大場 1996)、大場の理論をもとに身体表現によって高められる力やダンスの型として「型のあるダンス」と「型のないダンス」の 2 種類を提示した松原の理論（松原 2011）を挙げた。また、動きを音楽との関連から段階的な表現活動を構築したアルフレッド･エリソン(Alfred Ellison 1916～2007)の先行研究（Ellison 1959）をもとに、リズム表現から子ども自身の思いを実現するクリエイティブな身体表現活動へ発展する過程を示した。音楽を伴った身体表現には、子どもが明確な動きの感覚を身につけるとともに音楽に反応する力を養う「フォーマルリズム①」、音楽に対して子どもの基本的な体の反応を促す「インフォーマルリズム②」、音楽に対する自分の気持ちに従って動く「クリエイティブリズム③」の大きく 3 段階に分けられる。これらの目的や活動内容、子どもの主な反応を示した。また表 1 は、松原の示した「型のあるダンス」と「型のないダンス」、エリソンの「フォーマルリズム①」、「インフォーマルリズム②」、「クリエイティブリズム③」において、身体表現活動のテーマ、動き、音楽の提示がなされているかの検証を行った結果である。例えば「インフォーマルリズム②」は、テーマとその音楽の提示はあるが、具体的な動きは固

定化されていないため子どもの考えを自由に反映する表現が可能であるという点で、「型のないダンス」に近い。なお、「クリエイティブリズム」につては、a、b の 2 種類ある。

表１　表現するテーマ・動き・音楽からみる身体表現活動の特徴

	テーマの提示	動きの提示	音楽の提示
型のあるダンス	○	○	○
型のないダンス	○	×	△
フォーマルリズム①	○	○	○
インフォーマルリズム②	○	×	○
クリエイティブリズム③－a	×	×	○
クリエイティブリズム③－b	△	×	×

これら身体表現活動の段階をもとに、実際にピックアップした園での実地調査での活動の実態、年齢・発達別の子どもの反応、効果を実践事例と共に示した。

身体表現において、第一段階として「フォーマルリズム①」を経験する必要がある。子ども自身の身体感覚を知るうえで、様々な身体の動かし方や、歩く、走る、ギャロップ、スキップ等様々な動きを経験する中で、自分もできるという自信をもつことは大切であることが明らかになった。まず、保育者自身も一緒に子どもたちと動くことで子どもたちの興味を引き出し動きが伸び伸びとする。このような活動は動作が決まっており、全ての子どもたちが同じような動きを行うため、動きに自信が無い子どもも他児を観察しながら模倣することが容易である。しかしながら、この段階にいつまでも留まっているとパターン的な動きしかできなくなる可能性がある。

そこで次に、子ども自らの思いや考えを取り入れる第二段階「インフォーマルリズム②」へ発展する必要がある。ここでは、曲は同じであっても身体表現の方法は子どもたちが考え自由に表現する。ここでは、遊びの中で子どもの自発的な動きによって表現が行われ、さらにテーマが示されず子どもの思いが表現された動きに合わせて保育者が音付けを行うことで、子どもの動きはよりリズミカルになり、音が刺激となり表現がさらに意識化される。動きに合わせてピアノだけではなく他の楽器を使用することも可能であり、保育者自身もピアノから離れた身体表現が可能になる。

第三段階の「クリエイティブリズム③－a」として、保育者は子どもに曲名を知らせず、どのようにでも想像できる音楽を提供する活動へと移行する。音楽に合わせて子どもたちが思い思いに身体を動かすという、子どもが自由な表現ができる高次化された身体表現活動である。ここでは、子どもは音から感じたイメージを個々に異なる表現をする自由さが保証され、身体を動かす爽快感と共にどのように身体を動かすかという自発性、即興性、思考性、持続力が求められる。さらに、自分が考える表現が尽きたと感じた場合に、他児の動きを観察しそれを自分にも取り入れ、そこから他児と同じ動きを共有するうちに同期し合う仲間として認め合う姿も見られる。また「クリエイティブリズム③－b」では音楽が先行するのではなく、子どもが主体となり表現したいことを表す。ここでは音楽も子どもの動きも即興的であり、特に子どもの動きは様々になる。事例において、保育者は自らの考えで動いている子どもに「～のようで素敵」と具体的に声掛けをすることで、認められた子どもはさらに創造的な動きを作りだそうとする様子が見られた。

このように、身体表現活動は様々な段階を行き来しながら高次化していき、感性や表現する力を養いながら創造性を豊かにしていくことを保育者が意識することが重要である。それにより、身体表現活動がさらに有意義なものになると考える。音への感性から想像したことや子ども自身の思いをかたちで表す身体表現は、幼児期の産物に終わることなく創造する力として培われていくと結論づけた。

(4)　一つの動きを元にした身体表現活動の動画作成は、基礎的な動きと発展的な動きに分けて行った。例として「歩く」といった動きの場合、歩く方向や速度、歩幅や手幅の使い方によって、様々な「歩く」を表現することができるため、まずそれらの動きに保育者が気づくことができるように提示した。また、発展的な動きとしては、基礎的な「歩く」の動きをもとに、①具体物になりきる、②気持ちを表現する、③ストーリーを表現すると 3 種類の方法を示した。さらに、「自己表現力を育む」等のねらいに基づいた身体表現の種類、難易度、活動例、保育者による動きの言葉かけ例を提示し、持続的な活動のコンテンツとしてまとめた。

＜引用文献＞

① 大場牧夫、『新保育内容シリーズ　表現言論　幼児の「あらわし」と領域「表現」』、萌文書林、1996
② 松原豊（監修）、DVD『幼児の身体表現－発達的視点によるダンス活動－ 第１巻 リズムスキル、コミュニケーションの発達とダンス～型のあるダンスを中心に～』、新宿スタジオ、2011
③ Alfred Ellison, Music with children, McGraw-Hill Book Co, 1959

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 門脇早聴子	４．巻 5
２．論文標題 クリエイティブリズムに至る子どもの表現力の変容	５．発行年 2023年
３．雑誌名 幼年教育WEBジャーナル	６．最初と最後の頁 44-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 門脇早聴子	４．巻 18
２．論文標題 フレーベル式教育における「遊戯」受容の変遷－明治期の唱歌遊戯から幼稚園教育要領「表現」に至る教育者の関連から－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 音楽学習研究	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 門脇早聴子	４．巻 71
２．論文標題 幼小連携を踏まえた保育における楽器遊びの手法と意義	５．発行年 2022年
３．雑誌名 教育学部紀要（教育科学）	６．最初と最後の頁 93-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34405/00019949	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 門脇早聴子	４．巻 70
２．論文標題 オンライン授業における実技を伴う音楽科教育法の取組み	５．発行年 2021年
３．雑誌名 茨城大学教育学部紀要（教科科学）	６．最初と最後の頁 73-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 門脇早聴子
2．発表標題 保育における身体表現活動の変遷に関する研究（2）意義と内容
3．学会等名 全国大学音楽教育学会
4．発表年 2021年

1．発表者名 門脇早聴子
2．発表標題 幼小連携を踏まえた保育における楽器遊びの手法と意義
3．学会等名 日本保育学会
4．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

1．著者名 現代保育問題研究会、濵中啓二郎、小尾麻希子、金美珍、橋本樹、永井勝子、門脇早聴子、長谷秀揮、歌川光一、稲木真司、佐久間美智雄、藤田久美	4．発行年 2023年
2．出版社 一藝社	5．総ページ数 148
3．書名 保育・教育の実践研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	谷村　宏子 (Tanimura Hiroko) (20331788)	関西学院大学・教育学部・教授 (34504)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	城　佳世 (Jyo Kayo) (40722731)	九州女子大学・人間科学部・准教授 (37103)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	田中　健次 (Tanaka Kenji)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関